

Criticizing Democratic Home—
Herman Melville's "I and My Chimney" and Self

民主主義的な住宅を嗤う——
メルヴィルの短編「私と私の煙突」における自己

杉本 裕代

民主主義的な住宅を嚙う——

メルヴィルの短編「私と私の煙突」における自己

外国語共通教育センター 杉本 裕代

ハーマン・メルヴィルの短編集には、日常風景や室内空間を題材にとったものも多い。メルヴィルといえば、大海原や絶海の孤島などがすぐに連想される作家だが、その人生の年表を紐解いてみると、捕鯨船乗りとしてのキャリアによって、広漠として無法の空間を描写した彼の想像力が醸成されたのであろうことは誰しもが気づくことである。しかし、その一方で、その期間はわずか4年間というごく短い期間であることにも驚くのではないだろうか。彼は、72年間の人生のほとんどをマサチューセッツ州ボストン近郊で過ごした。

本論考は、メルヴィルが人生の大半を過ごした陸地での出来事を描いた作品に注目しながら、特に、「私と私の煙突」(1856)をとりあげ、そこにある詩学と呼応する作品として、短編集『ピアッツァ・テールズ』の「ピアッツァ」を論じる。この二つの短編が、19世紀アメリカの政治的言説と生活文化を結びつける試みになっており、そうしたテーマ設定は、短編集だけのものではなく、彼のキャノンとされる作品群とも共通するものであり、彼の創作スタイルの根幹をなすものだと考えるからである。

日常生活に登場する机や煙突、ベランダなど、モノとそれを取り巻く小さな空間を、メルヴィルはコミカルに描写しながら、そこに時事的な話題や風刺的なトーンなど、政治的な主張を織り込んでいく。そこには孤独な作家としての憂いや絶望がにじんでいるのだが、一方で、メルヴィル作品には、登場人物の行動とは一見無関係に、語りの生命感ともいべき力強さがある。

本論文では、そうしたスタイルを、19世紀アメリカの大衆文化の隆盛や、それに伴うコミュニケーション形態の変化と関連づけながら論じる。上記の作品を考察しながら、モノと身体の関係性を通じて、メルヴィル作品の語りの特徴を探ってみたい。

1. 民主主義への懐疑

「私と私の煙突」(“I and My Chimney”)は、語り手である初老の白髪頭の男性が、自分の古びた家にある煙突を、「私の親友」として語り、家事の合理化を目論む妻によって、煙突を壊して家をリノベーションの危機に瀕するも、「君主のような威厳をもつ」煙突を守ろうとする物語である。主人公は、コミカルな語りで、煙突を時にロシア皇帝になぞらえたり、また、「ローマ教皇や枢機卿全員の前で大ミサを行うにふさわしい祭壇」とも喩えている。

この大げさなまでの煙突への崇拜の裏には、まず一見したところ、女性文化や女性の積極的な活動へのマスキュリンな揶揄が入っているようにみえる。煙突を撤去してしまおうとする妻を説き伏せるために、主人公は家の建築的構造をもちだして、煙突が二階建ての家を支える土台になっていると説く。すると、妻も自説を持ち出して反論する。主人公からすると、「女というやつは、建築の実際を知らないに等しい」(“women know next to nothing about the realities of architecture.”)と言って、やんわりと、しかし痛烈に彼女の無知を批判する。(Chimney 94)積極的に意思を表明する女性への男性のばやきが聞こえてくるようだ。

更にいえば、文化史に照らしてみると、この夫婦間の対立については、当時のアメリカの住宅建築のブームを背景にしていることがわかる。女性が日当りの良い住宅をやたら立てたがったというある種のブームがあり、メルヴィルは、それに反発してわざと北向きのベランダを設置したという伝記的な事実がある。メルヴィルが家の建築と女性文化を結びつけて考えていたことは確かなようである。さらには、女性作家キャサリン・マリア・セジウィックがこうしたブームの熱心な信奉者だったために、これを知ったメルヴィルの対抗意識を読み取る論考もある。(Balaam 60-65)

こうした話題の背景には、より大きなアメリカの住宅建築が転換期を迎えていたことも関係しているだろう。19世紀中庸までは、ヨーロッパ同様、トマス・ジェファソン以来のアメリカ建築においても、住宅であれ何であれ、建築物のデザインを決定するのは、建築家の役割であり、それがたとえ、個人の邸宅であっても同じであった。しかし、アンドリュー・ジャクソン・ダウ

ニングは、そうした習慣に一石を投じ、施主（家主）の意向を取り入れる建築を行った。風景作家として出発したダウニングは、完成予定の家の概観をスケッチし、施主に提示した。いわば施主が主人公となる建築を始めたのである。

そして、そこには、単なる設計の発想の転換だけでなく、民主主義的なモメントも伴う。彼は、イギリスの風景をアメリカに移植する際に、彼なりの読み替えを行っている。それは、Englishman が田舎で飾り気のない（uncomplicated）やり方で、「魂の洗濯」をするための家であった。こうした屋敷をアメリカに導入する際、ダウニングは、階級が存在しない国アメリカでは、無条件にその飾り気のなさを体験できると考えていた。そして、そこで感じる解放感を民主主義的風土として捉え、自らの建築の主たる目的とし、それらは女性たちの賛同を集めた。こうして、家の建築と民主主義とが結びつく瞬間が、19世紀前半のアメリカに誕生していた。

女性の文化と、民主主義がモノを通じて結びつく例は、他にもある。暖炉と煙突という観点からいえば、当時のアメリカでは、アメリカ家政学の創始者といわれるキャサリン・ビーチャーが、ストーブの設置を呼びかけ、家事の合理化をはかる女性達がストーブの導入に積極的だったのに対して、暖炉は、昔ながらの家庭の温かさを象徴するものだと主張する立場とで論争があった。（杉本 102）

しかしながら、女性文化への距離感や否定的感情だけに反応するだけでは、この作品がもつ強いメッセージ、ひいては、作者メルヴィルの矜持を見逃す事になってしまう。まずは、この作品のなかで繰り返し、ほとんどしつこいまでに繰り返される、煙突の擬人化の表現についてみてみることで、家庭内の喧しい夫婦喧嘩の構図になぞらえた、政治的なメッセージが見えてくる。

まずは、ここで当時の家庭建築におけるイメージを確認しておきたい。アメリカ文化における家事アドバイザーの歴史を検証したサラ・A・レヴィットによれば、19世紀の家事指南書では、「食堂は家の中で唯一「男らしい」部屋だと考えた」という（50）。とくに、この作品の主人公のように、中流家庭は、書斎やビリヤード室といった男性の趣味の部屋を持つことができなかったから、唯一、一家の中心としての食堂が男らしさを表現する重要な空間となっていたのである。

男らしさが保たれる唯一の空間として、暖炉のある食堂を考えるならば、暖炉につながる煙突を主人公が称賛する言葉遣いが、過度に男性的な連想を呼び起こすものになっているのも、納得がいく。主人公は、煙突のことを「この家の王様」(the King of the house)ともよび、また、ジュリアス・シーザーや、ロシア皇帝と喩えられる。そして、その姿を形容するにあたっては、「孤高の」(solitary and alone)といった語が用いられる。

そして、この男らしさと政治制度の交差は、暖炉の構造にもおよぶ。この短編の主人公は、妻が提案する暖炉の特徴を、「部屋を合理化する(to economize room)」ことだと理解している。この古式ゆかしい煙突に対して、妻が導入使用としているのが、「近代的な暖炉」であり、主人公は次のように述べる。

近代的な暖炉はみな、分岐した小さな管がある——土台から煙突のてっぺんまで、至る所に枝分かれしている。少なくとも、そういう配置でいいとされている。しかし、これは自己中心的で、勝手にみえませんか？なんといえいいのか、全ての分岐管は、独立した石造りの建造物があるのではなく、家の真ん中に1つに連帯したレンガが集まって群れをなしているのでもないのですから。(Chimney, 24)

ここで示されているのは、単なる暖炉の構造だけではない。テキストを細かくみてみると、そこには、貴族政治や君主政治が良きものとして語られていることに気づく。実際、煙突は、「英国貴族」(English aristocracy)とも表現され、「評議会」(council)と対比されてもいる。そして、レンガの塊をfederal という形容詞を使って表現する。1つの堂々とした煙突ではなく、小さくて数が多く分岐している小煙突。煙突の擬人化を、そのまま小煙突にもあてはめて、人間の喩えと考えるならば、夥しい数の小煙突は、人びとの集合体であり、貴族制や専制君主制と対比されうる政治形態とすれば、それは民主主義政治ということになるだろう。

また、女性が進める合理化(economize)とは、暖炉や家屋の建築など、生活文化全般にわたり、経済活動もまた連動していた。合理化という語には、

女性の活躍という意味で、権利擁護の意味合いや進歩的な響きが含まれていた。そして、そこには、モノを通じた表皮活動を連想させ、資本主義の表象でもあった。

このように、「私と私の煙突」のなかに立ち込める批判の視線と、ユーモアのある文体から伝わる生命感というものは、民主主義や資本主義という、19世紀アメリカを席捲していた新しい制度に対する疑義であったことがわかる。

2. 「信用詐欺師」のいる民主主義的空間

しかしながら、社会や政治制度に対する不信といっても、メルヴィルのどのような態度なのか、もう少し吟味してみる必要があるだろう。「私と私の煙突」にせよ、後述する「ピアッツァ」にせよ、メルヴィル独特の皮肉めいた笑いがあり、また、そこには強烈な批評精神があるにせよ、単なる絶望や拒絶、孤立を求めるだけではない、問いかけがもつ躍動的な何かが発せられているというのが本論の主張だからだ。

社会に対するメルヴィルの心性をもう少し詳細に考えるために、19世紀におけるアメリカの政治的空間と大衆文化を扱った論考を参照してみたい。ジム・カレンは、『デモクラシーの技法』のなかで、メルヴィルの中編『信用詐欺師』を引用しながら、そこには、階級問題を軸にして次のように分析している。

出現しつつあった中流階級にとって、信用詐欺師という存在が、嘆かわしい不快な存在とされ、大きな不安を駆り立てる存在であったのは、その理由として、それが自己信頼の強固な神話や、階級上昇の可能性、倫理の遵守といった、民主主義システムの正当性の根管に係る理念を欺く存在だったからである。(Cullen 67)

つまり、メルヴィルが少なくとも『信用詐欺師』において提示していたのは、民主主義そのものに対する懐疑というよりも、それが輝かしい制度とし

て成立するためのメカニズムを詳細に理解したうえで、その制度の危うさを指摘していたといえるのかもしれない。むしろ、メルヴィルの批評の矛先は、民主主義自体に向けられていたというより、カレンが言及している中産階級の人々、さらに言えば、民主主義のシステムに完全に依存してしまう人々のことではないだろうか。それは、ちょうど、「私と私の煙突」において、妻が、家事の合理化を信奉するあまり、家の中心である煙突を撤去するという大胆な（主人公にとっては、暴挙ともいうべき）行為にでる姿とも重なる。

メルヴィルの眼差しは、政治的なメッセージそのものを伝えるのではなく、そのシステムに対する深い考察や精緻な観察があればこそ、そこに小説としての豊かさが生じ、メルヴィル作品の特徴が光るようになる。「私と私の煙突」は、民主主義システムに対する適切な考察が、暖炉や家屋建築をめぐる言説と巧妙に重ね合わされながら描かれている。政治制度と家庭文化という2つの分野に対しての構造分析が適切に行われているからこそ、このような作風が可能になる。

このようにモノをめぐるポリティクスが適切にメルヴィルによって把握されているとして、それならば、モノと人間の身体とはどのような関係性を生成しているのだろうか。「私と私の煙突」では、主人公の私が、煙突を熱烈に信奉するあまり、モノと人間の関係性としては、むしろ理解がしづらくなってしまう。19世紀の空間を描くなかで、人間はどのようにモノに影響されながら生きているのか、モノと空間のなかで、いかなる感情が発動しているのかを考えてみよう。

3. “Piazza” に座る身体

繰り返し述べているように、孤高の作家メルヴィルというイメージは、様々な彼の作品の登場人物やその行動とも一致するところがある。だから、モノと人間の身体の関係性といっても、孤独で偏屈な人物たちは、何の影響も受けず、ただ、おのれの思考によってのみ人生を生きていると、各作品を読み込んでしまう。しかしながら、それではないかが足りないのではないか。少なくとも、前述したような、メルヴィル作品に宿る生命感を説明した

ことにはならない。ここでは、「ピアッツァ」を手掛かりに、主人公の身体がどのようなベランダという空間を通じて、どのように制限され、ときに解放されているのかを考えてみたい。

主人公は、田舎暮らしを決め込んで、古い farm house を手に入れる。自分の家に足りないもの、それはピアッツァ（ヴェランダ）であると気付いて、改築にとりかかる。彼にとっては、ピアッツァは家に絶対に必要な場所だった。（“A Piazza must be had.”）前述の伝記的事実にあるように、メルヴィル自身にとっても、そこは特別な思索の場所であり、マサチューセッツの山々の景色を楽しむ場所だった。（Balaam 62）

主人公は、この作品でも、批評精神を發揮し、そして、現実世界への幻滅を味わうことになる。「私と私の煙突」では、その幻滅は主に、妻と女性文化へ向けられており、最初から距離感を持った描写が続いていた。しかしながら、「ピアッツァ」では、謎の女性への強い関心から物語が始まる。

主人公は、ベランダから眺める景色の壮麗さに満足しながらも、そこから見える山の彼方に光る一点を見つけると、そこが気になって仕方がない。きっとそこは、夢の国 (fairy-land) であるに違いないと思い、ついにそこへ向かって旅に出る。山を分け入って、その地へたどり着いてみると、光っていたのは、とある古ぼけた屋敷だったと判明する。

ここで読者は、観る側であった主人公が、その視線の対象の世界に踏み込み、視線のポリティクスが崩れはじめることに気付く。なぜなら、夢の国には、マリアンナという娘が住んでいたのだが、彼女もまた、日がな山の彼方をみつめては、小さく輝く場所をみつけて幸せの国だと想いを馳せていた。彼女が眺めていた場所は、主人公の屋敷のことだった。両者は、お互いに、お互いの家を遠くから眺め、光のいたずらにより、お互いの家が豪華で素晴らしい建物だと勘違いしていたのである。主人公は、観ているだけではなく、観られる受動的な立場にも、我知らずいたことになる。

こうして、夢の国の女王は、単なる自分の空想でしかなく、マリアンナに対する幻滅も抱いて、主人公は、物語の結末で次のように述べる。

もう十分だ——私の小舟をもはや夢の国へと出航させることはあるまい。ピアッツァにずっと居る。ここが私の特等

席だ。ここが円形劇場、私のサン・カルロ劇場だ。そうだ、
風景は魅惑的だ——幻影も完璧だ。(Piazza 236-237)

つまり、自分が眺める世界への拒否の態度であり、もうそこへ自ら積極的に
参与することはないという意味表明が行われているように読める。主人公
に必要なのは、リアリティではなく、眺める風景と幻影だけでよいといった
語りである。

しかしながら、本当にそれだけであろうか。再び、最初の疑問に戻るなら
ば、このように表面的には、世間や社会への拒否や孤立を積極的に示してい
るようにみえて、その語りから湧き上がるエネルギーはなんなのか。そのヒ
ントのために、主人公の身体が置かれている場所——ピアッツァが、特等席
(my boy-royal)と表現されていることに注目したい。

そもそも「ピアッツァ」とは、イタリア語で回廊のことであり、その構造
様式が、やがて舞台建築にも採用され、舞台を上から眺める階上の客席エリ
アのこともピアッツァと呼ぶようになる。(杉本 100)シェイクスピア劇
への言及がメルヴィル作品には頻繁に登場するが、この作品は、はじめから
演劇や劇場のイメージが重ねられていると読むことも可能であろう。そし
て、主人公が、劇場の客席にいるという構図が、なによりも、主人公の主体
の有り様を示す重要なカギとなる。

4. 演劇的な空間で生成されているもの

「ピアッツァ」で主人公が座っている北向きのベランダが、劇場の座席と
して機能していることを、これまで確認してきた。そして、劇場の座席か
ら、いわば、舞台上の世界へ出かけて行き、そこで妖精の女王ともいうべき
女性に出会い、失望する有様が、そのまま、主人公の現実世界への失望、ひ
いては、メルヴィル自身の失望へと重ねられていく過程を追ってきた。

厭世的な態度に満ちたメルヴィル像というのは、間違いなくこの作家の
一つの姿であろう。しかしながら、この作品を始め、メルヴィル作品に常
につきまとうユーモアやペーソスの雰囲気を考えてみると、もうすこし、その
厭世的な憂いのなかに複雑なプロセスがあるのではないだろうか。

最後に、19世紀のアメリカ大衆文化への考察を通じて、再度、メルヴィルの2作品をみってみることで、メルヴィルの社会へのメッセージの構造を分析してみたい。そうすることで、モノと身体が、メルヴィルの描く風景のなかで、どのように解放され、新しい解釈の可能性を提示しているのか考えてみたい。

まずは、19世紀前半のアメリカにおいて、大衆文化と演劇の性質について概観してみよう。竹内が、ローレンス・W・レヴィーンをひきながら確認しているように、19世紀前半のアメリカにおいて、劇場は分ちがたく街の文化のなかに組み込まれていた。さらに言えば、シェイクスピア演劇も盛んに上演されており、また、メルヴィル自身も渡英の経験もあって、作品中に繰り返しシェイクスピアへのオマージュが織り込まれている。しかしながら、竹内がそこで注目するのは、単なる演劇の流行や現象ではなく、「個人レベルのコミュニケーション・パターンまで劇場内の言語力学と分ちがたく結びつけられていた」という点である。

『情動と身体』において、竹内勝徳は、そこに、アメリカの「トール・テール」の伝統と博物学的空間との接続によって、19世紀アメリカ社会のコミュニケーションの様態が、より演劇的で双方向の性質が濃いものになっていたという。アメリカという広大な大地において、時代はまさに啓蒙主義に始まる新しい知の体系が隆盛し、アメリカは、博物学や自然史学の実験場として、自然への関心が国家的な関心事になっていた。

そうした中で、演劇舞台での様々な演出技法は、舞台の外を取り巻く「荒野という環境をより刺激的に感じさせてくれる演出」であり、自然での生活を、「危険だがロマンティックでミステリアス」なものとして感じさせ、人々の心を魅了した。つまり、博物学的関心や自然への興味が、トール・テールの伝統と相まって、演劇舞台上では、超自然的な魔術なども結びつき、ある種の説得力を帯びた物語として、観客の前に提示された。そこでは、観客と役者とがセリフを交わすこともあり、ステージと客席の区別が曖昧であった(注1)。劇場は、一方的な視線を注ぐ場所ではなく、「観客参加型の虚構のエンターテイメント」であり、ある種の「バーチャル・リアリティと化していた」のである。(竹内60-61)

こうした舞台と観客との双方向的な関係性、そして、そこに生まれるエン

ターテイメントのリアリティは、メルヴィル作品の描写がもつ魅力とも連動しているのかもしれない。たとえば、デイビッド・グリムステッドは、19世紀のアメリカ演劇や大衆文化を論じた『メロドラマの全貌』(Melodrama Unveiled)において、当時の上演演目に共通していた特徴として、「本物より本物らしい」ことを挙げている。グリムステッドは、それを論じるにあたり、メルヴィルの『信用詐欺師』からの一節を引用し、「劇場の観客は、娯楽を求めているだけではなく、心の底では、現実の生活が提示するものよりも、よりリアルなものを求めている」のだと述べる。つまり、観客は、自然(ネイチャー)を求めているが、「自由な発想で捉えた、生き生きとした自然であり、結果、変容している自然」を欲しているのだ。(Grimsted 234)

現実と舞台上の虚構の区別が曖昧になることが知的興奮や娯楽として根付いていた社会のなかでは、観客も、冷静な観察者としての立場はもはや確保できなくなる。「ピアッツァ」の主人公も、物語の結末で、自らの特等席としてのピアッツァに戻ったとしても、それは社会への参与の決別だけを意味するとは言えないだろう。むしろ、自らもステージに上り、観られる対象となったとも言える。マリアンヌに出会い、主人公の身体も彼女の視線の対象だったと知る経験の後であれば、なおのことである。むしろ、アメリカの劇場がそうだったように、主人公も、自然と事物のまえて、知的緊張感を味わいながら、世界へと積極的に参与し始めたのかもしれない。

竹内は、『情動と身体』のなかで、『白鯨』などのメルビル作品における身体の表象について、身体や動物や物質の関係性を論じ、ドゥルーズ＝ガタリの「器官なき身体」について言及する。そして、「人間から非・人間への生成変化」としてのアフェクトという概念を用いて、主観によって管理・管轄されないモメント、「精神作用を超えた時限で身体感覚を通じて」物や動物、環境へと変化する瞬間を、メルヴィル作品の中に見出そうとしている。(『情動』105)

「ピアッツァ」や「私と私の煙突」、それぞれの作品において、ベランダや煙突といったモノへの精緻な考察や、言語化されえない刺激をそれらモノから感じ取ることによって、主人公たちは、自らをとりまく環境へ、ひいては、政治空間や生活文化から発せられている知の世界へと、自らの身体を生成変化させているのではないだろうか。そうしたプロセスに伴う身体感覚の

共有こそが、本論文が論じてきた「語りの生命感」とつながるものであろうし、また、メルヴィルの創作法の特徴と結びついているものであろう。

註

注1

博物学の知の伝播と双方向コミュニケーションというキーワードは、竹内が指摘するようなアメリカ的な演劇性を帯びながら、やがて教育の場面にも影響を与えた。19世紀中ごろに、アメリカ全土で参観であった「ライシウム運動」という成人教育活動にも、同じ特徴がみられる。

引用参考文献

- Cullen, Jim. "DEMOCRATIC VISTAS: THE EMERGENCE OF POPULAR CULTURE, 1800-1860." *The Art of Democracy: A Concise History of Popular Culture in the United States*, New York: Monthly Review Press, 1996.
- Dowing, Andrew Jackson. *A Treatise on the Theory and Practice of Landscape Gardening : Adapted to North America, with a View to the Improvement of Country Residences*. New York : Orange Judd, 1875.
- Grimsted, David. *Melodrama Unveiled: American Theater and Culture, 1800-1850*. Berkeley: U of California P, 1987.
- Melville, Herman. "The Piazza." *The Piazza Tales*. St. Evanston: Northwestern UP, 1996.
- . "I and My Chimney." *Herman Melville: Pierre, Israel Potter, the Confidence-Man, the Piazza Tale*. New York: Library of America, 1984.
- Balaam, Peter. " 'Piazza to the North: Melville reads Sedgwick.'" *Melville and Women*. Schultz, Elizabeth and Haskell Springer eds. Kent: Kent State UP, 2006.
- 杉本裕代「ひとりぼっちの広場で：建築文化のネットワークを通じてみる“The Piazza”」、『アメリカ文学評論』、平成20年7月 Vol.21. 筑波大学アメリカ文学会、p.98～112.
- 竹内勝徳 高橋勲 編『身体と情動：アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』、彩流社、2016年
- 竹内勝徳「大衆文化論の試み(2) アンティベラム・アメリカにおける劇場の働きと演技性身体が登場」『人文学科論叢』鹿児島大学、(51), 59-73, 2000年
- 橋本安央『痕跡と祈り：メルヴィルの小説世界』、関西学院大学研究叢書、2017年
- レヴィット、サラ・A『アメリカ家庭と住宅の文化史——家事アドバイザーの誕生』岩野雅子ほか訳、彩流社、2014年